

# アーカイブ 通信 No.9

No.9

2017.3.1

◆編集・発行：

ネットワーク・市民アーカイブ

◆tel・fax: 042-540-1663 (事務局)

tel・fax: 042-536-5535 (市民アーカイブ多摩)

E-mail: simin-siryo@nifty.com

www.c-archive.jp

〒190-0022 立川市錦町 3-1-28-301 (事務局)

◆正会員 1 口 6000 円、賛助会員 1 口 3000 円 / 年

ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226

口座名：市民アーカイブ

公開学習会 シリーズ“原点”から考える② 報告

## アーカイブを市民の力に —道場親信の仕事と私たち

2017.1.9 於：一橋大学

共催：一橋大学社会学研究科市民社会研究センター



当会設立時から、世話人も担い、市民アーカイブ設立の運動に関わった道場親信さん(和光大学教授)が、昨年急逝され

1997年  
8月1日、国、  
県、自治体、元  
反対同盟員、  
新東京国際空  
港公団(当時)、地元住民などで  
構成する「成田空港地域共生委  
員会」に歴史伝承部会が発足し  
た。当時、集団移転や関係者の  
高齢化などにより関連資料の  
散逸が懸念され始めていた。  
収集の予備調査をスタートす



成田空港問題「歴史伝承  
委員会」で残したこと  
波多野ゆき枝  
(NAA歴史伝承委員会)

た。当会では、道場さんの仕事か  
ら市民アーカイブの意味を再考  
するシンポジウムを開催した。  
司会は町村敬志(当会運営委員、  
一橋大学)。参加者40人。  
(記録は各報告者)

るが、すぐに調査研究員を強化  
する必要に迫られた。部会事  
務局長となった福田克彦氏は  
早稲田大学の恩師・鹿野政直  
先生に相談し、道場さんが推  
薦されたが、当初彼は、反体制  
の巣窟のような成田に出かけ  
ることは学者としての身体に  
危険が及ぶのではと断ってき  
た。同年12月に福田氏は、鹿野  
先生の依頼により早稲田大学  
で成田空港問題の講演をし、道  
場さんと出会うが、1か月後の  
1月に福田が急逝。道場さん  
は葬儀に参列、「同盟葬のよう  
でまったく不思議な体験をし  
た」と話していた。結局彼は、  
98年4月から09年3月まで12  
年間、当委員会に携わった。  
1、成田空港地域共生委員会  
歴史伝承部会時代  
(98年4月〜04年3月)  
道場さんは月7日程度の勤

務し、主に成田地域を中心に元  
空港反対同盟幹部や空港公団  
OBへの聞き取りを担当。特  
に初期反対同盟の動きを克明  
に記した小川明治の手帳の内  
容を解明した。聞き取りは堀  
越昭平、内田寛一、板橋孝、島寛  
征、佐山忠等へ、資料収集は故  
小川明治・源、故福田克彦、故  
郡山吉江他へ行っている(敬称



市民活動資料センター「市  
民アーカイブ多摩」とその運  
営団体である当会はこの4  
月で丸3年になります。開  
館3周年を記念し、標記の講  
演会を開催します。

昨年暮れから今年にかけ  
て「PKO部隊の日報廃棄」  
『高速炉』議事録なし』など  
の見出しが、新聞に載りまし  
た。私たちが自衛隊や原発  
政策の是非を考える時に必

要な、根拠や証拠となる公文  
書の廃棄や不在、などを報じ  
たものです。  
情報公開関連法が制定さ  
れて20年近くになる現在、情  
報公開をめぐる状況は、どう

なっているのでしょうか。  
現場で政策への批判や積  
極的な提言を重ねてこれら  
れた「NPO法人 情報公開ク  
リアリングハウス」の三木  
由希子さんをお招きし、情  
報公開の現状を話してい  
ただき、これからのアーカイブ  
の役割を考えます。  
当日は1時15分〜2時15  
分まで定期総会も開催。  
ご参加をお待ちしています。

開館3周年  
記念講演会

## 「情報公開」の現在とアーカイブ

講師：三木由希子さん(情報公開クリアリングハウス)

6月18日(日)午後2時30分 たちかわRISURUホール

略)。ミニ展示「空港前景 木の根・天浪の人々」を周辺市町や空港内で第3次まで開催。

2、財団法人航空科学振興財団  
歴史伝承委員会時代  
(04年4月～09年3月)

成田空港の民営化にともない、歴史伝承部会が財団に移管された。06年に2週間開催した『土・くらし・空港 「成田」40年の軌跡1966―2006』の作業に携わった。

07年頃より歴史伝承委員会は成田国際空港株式会社(NAA)への移管準備に入る。道場さんは事業移行のためのプロジェクトチーム会合のメンバーとなった。この時の主な記述に「歴史伝承部会・委員会12年の歩み※」「歴史伝承委員会活動成果報告」「歴史伝承部会・委員会収集資料の帰属と管理運用に関する問題提起」「NAA素案」に関する問題点ならびに懸念事項「08年歴史伝承委員会調査報告書 第Ⅷ章「歴史伝承館(仮称)建設に向けて 素案※」などがあり、多くが現在の活動の指針となっている。

09年4月、道場さんは和光大学に准教授として着任、当委員会はNAA事業として「成田空港 空と大地の歴史館」開館の準備に入った(※を含む道場さん作成の資料を当日配布。希望者は事務局まで)。

## 「市民・住民運動資料研究会」等の活動を通じて

平川千宏(元国立国会図書館)



「市民・住民運動資料研究会」は、市民運動や住民運動の資料をどのように集め、保存・整理し、活用するかを検討するために、住民図書館(76～01年)が閉館した翌年、02年7月に発足した。

以後、10年11月までの8年間に39回の例会を重ねたが、道場さんは宮崎省吾さんに誘われて参加し、以後中心メンバーの1人として活躍した。道場さんは、自身で資料を使って運動の研究をすると同時に、資料そのものの収集や保存、整理についても強い関心を持ち、関わり続けた。研究会でしたことは、大まかに言って様々なテーマで報告・討論した例会・見学会と、資料について行った全国調査の2つである。

例会では、「成田空港問題の資料について」や「資料の散逸を防ぐために」を始め、7回も報告者になってくれた。また、全国調査では、福井の「平和文化資料館・ゆきのした」、富山の「清流会館(イタイイタイ病関係)、新潟の「新潟水俣病資料館」の三か所へ赴き、報告書に詳細な報告

を書かれた。

研究会で模索したができなかったことは、①市民活動資料の収集・整理・保存・利用に関するマニュアルづくり、②市民活動資料所蔵機関・団体のネットワークづくり、③市民活動資料所蔵機関・団体のガイドブックづくりである。

当会以外に、私が知る範囲での道場さんと資料に関わることは、(1)06～08年まで、「ネットワーク・市民アーカイブ」の前身である「市民活動資料・情報センターをつくる会」の世話人をつとめた。(2)元住民図書館館長・丸山尚からの聞き取りを行い、『和光大学現代人間学部紀要』(6号)に発表した。この中では、特に住民図書館の前身である「日本ミニコミセンター」についての聞き取りが貴重である。(3)道場さんの所蔵資料のうち、「東京南部文化集団」の浜賀知彦さんから預かっていった日本各地(東京南部を除く)の文学系サークル雑誌1078冊は、2年ほど前に国立国会図書館に納められた。他の膨大な資料の行方が心配である。

道場さんが資料の保存や整理・活用について論じた文献の一覧をレジュメに添えた。これらの中から道場さんの遺志を受け、残された資料も今後に生かしていくことが肝要だと思う。

## 東京南部サークル運動資料と道場さん―文化工作研究会との関わりを中心に

山本唯人(青山学院女子短期大学)

50年代

「東京南部」と呼ばれた品川・大田・港区界隈では、朝鮮戦争の勃発などをきっかけに、地元労働者などによる詩のサークル運動が活発に展開された。当時のサークル誌はガリ版刷で、体系的な収集・保管もなされなかったため、時間の経過とともに散逸し、あまり知られない存在になっていた。03年9月、雑誌『現代思想』編集長の池上義彦さんが下丸子文化集団メンバーの井之川巨さんにインタビューした際、当時の活動を知り、池上さんの呼びかけに答えた研究者と共に「文化工作研究会」を設立して、研究を開始した。この過程で、大田区在住の浜賀知彦さんが、70年頃から個人で、東京南部を中心に発行されたサークル誌を収集した結果、膨大なサークル誌のコレクションを所蔵し、66誌におよぶサークル誌の目次と解題をまとめた雑誌細目を刊行していることが明らかになった。また、井之川さん、城戸昇さんなども、70年代ごろから断続的に、



独自の資料収集や当時書かれた詩や詩人の再評価、解題をまとめる作業を進めていた。このように、東京南部サークル運動資料は、運動に関わった当事者やそれに近い立場の人たちによって、運動終息後、長期にわたって実物資料が収集され、そうした収集家たち自身による目録・解題がかなりの分量で存在していることが特徴の1つである。

道場さんは、文化工作研究会に初期から参加し、浜賀コレクションに出会ってからは、テキストの読み込み、関係者のインタビューなどを精力的に行い、下丸子文化集団を軸とした東京南部サークル運動研究を主導する役割を果たした。

道場さんは、07年12月に刊行された共同研究の「報告書」である『現代思想』「戦後民衆精神史」特集に、「下丸子文化集団とその時代」「工作者・江島寛」を発表し、その後、復刻版『東京南部サークル雑誌集成』(不二出版)の解説・解題、08年6月から全10回におよぶ戦後文化運動合同研究会の中心的な企画・運営者となり全国的なサークル運動の掘り起こしにも努めた。16年、これらの研究成果が、『下丸子文化集団とその時代―一九五〇年代サークル文化運動の光芒』(みすず書房)、『サークルの時代』を読む―戦後文化運



動研究への招待」(影書房、宇野田尚哉などとの共編著)として刊行された。

道場さんが、サークル誌の読み込みを軸に、全国の研究者・関係者と集团的に展開したサークル運動研究は、歴史認識の更新を促す「記録」の潜在力を再確認させると共に、人から離れていく資料を、もう一度、人との関係のなかに結びなおす、新たなアーカイブのあり方を問いかけるものでもあるだろう。

## 報告を受けて―道場さん にとつての市民アーカイブ

杉山弘 ネットワーク市民アーカイブ



道場さんが当会の世話人だった頃は、アーカイブの設置を行政や大学、企業などに働きかけてゆくのか、自前でつくるのかで悩んでおり、会議の話題も事務的な話が多く、道場さんとも、ゆっくり話をした記憶がない。だから、もっと話をしたい、尋ねたい、という思いが募っている。

では何を話し、尋ねたいのか。ぼくらのアーカイブが、市民によるアーカイブ運動だとすると、ぼくらは運動当事者だ。また、アーキビストでもあり、さらに調査・研究者でもある。3つの属性は、ぼくらを矛盾す

る衝動に駆りたてる。収集方針にからめて言えば、運動当事者としては、敵や裏切り者の資料を集める必要はない、と考える。一方、アーキビスト、あるいは研究者としては、敵、あるいは裏切り者、脱走者、はたまた「ノンポリ」という評価をする前に、あらゆる資料群を収集したい。この矛盾する衝動は、成田空港問題の歴史伝承においても、何を収集し、保存・伝承してゆくか、という問題として顕れている。

もう1点は、ぼくらのアーカイブが、市民運動や住民運動ではなく、市民活動のアーカイブと名乗っていることに関わる。道場さんは論文で、60年代から70年代にかけてあった住民運動と市民運動をめぐる議論が未解決で、それ故、住民運動から市民運動へ、さらにNPOへと通っている、その曖昧さが「市民活動」という言葉を産んだ、と述べている。

ぼくらが「市民活動」のアーカイブを自称しているのは、趣味やレクリエーション、スポーツ関係など、運動資料とは考えにくい資料も収集しているからだ。が、「市民活動」の意味についての論理的な問題が未解決であることは、やはり自覚していたと思う。サークル運動についての道場さんたちの研究は、趣味

やレクリエーションとも見える人びとの活動が、ある政治性を帯びていたことを明らかにされた。反対に政治的・集团的なものとは見てこなかった種々の運動に、個人的な精神の営みがあることを示したとも読める。だからこそ「市民活動」という言葉をどう考えるのか、道場さんと相談したかった思いが募る。

## ◆会場から

参加者 アーカイブの役割は？

波多野 「空と大地の歴史館」ではどこまで見てもらうのか、どこまで残すのかという2点の課題がある。記録に残すべき資料は膨大で、誰に、どこまで残すのかの判断は難しいが、出るだけ多くのものを、とりあえずは百年先をターゲットにしている。

参加者 道場さんは資料と市民をどう結び付けるか、という仕事をしていたと思うが、実際にどう活用していたのか？

波多野 道場さんは細かい人で、残された手帳を読み解いたりしていた。彼のような「歴史オタク」がいるからこそ、後世に記録を伝えられる。

平川 研究者として、市民に直接役立つというより、研究資料という視点に重点を置いて考えていたと思う。

杉山 資料は後でどう使われるかは分からないが、道場さんはその資料がどのように人の目に触れるか、いろんな仕掛けをしていたと思う。

参加者 道場さんのお人柄やエ

ピソードを皆で共有したい。  
ロバート・リケット(和光大学元教員) 道場さんのエネルギーは、時々ついていけないくらい熱い。目指しているものがその分大きく輝いていて、一緒にいて得るものは大きかった。彼は早稲田大学在学中に、在日朝鮮人の同級生が逮捕されたことに対し、支える会のメンバーの1人として活動した。私もその運動に関わっていた。私もない関係がいつぱいあった。これをきっかけに彼は日本の裏面を見て、社会学をやるうと思ったと聞いている。和光大に勤務してからは大変な学科再編に関わり、ほぼ1人で企画書を作ってやり遂げた。彼の研究室にはいつも膨大な資料があり、夜中に



残ってコピーする姿が思い浮かぶ。残された資料も心配。49歳で他界とは悔しい。  
波多野 私は学者ではないので、道場さんと対等に語り合えないというコンプレックスがあった。よく怒られたりもした。もっと話をすれば良かったと思うし、個人的なことで少しは影響を与えられたと思うこともある。12年間一緒にいたので、思い出はいっぱいある。

山本 今日の話から、資料を残し、その保存した資料の息を吹き返させるためには、さまざまな人がいることが大事だと確認できた。そのためにはフラットに語り合える関係が重要で、そこに全力を傾けていたのが道場さん。道場さんはあまり自分を見せないの、私自身もどういふ人か何も知らなかった。けれど、「道場さんがいると安心する」という声をよく聞く。とても人に慕われていたように思う。

## ◆アンケートから

・道場さんの関心、お仕事の広さ、奥行きが深さが、3人のパネラーによってくつきり浮かび上がった感じがします。亡くなったことが、本当に残念。

・直接関わった機会は少なかつたけれど、リケットさんと同じく間接的な接点がこれまで、これからは多いと思う。山本さんの「道場さんを何も知らない」「フラットな関係を作ることに尽力していた」という発言にとっても共感した。

## 第2期 緑蔭トーク報告

市民アーカイブ  
多摩では、今年度も緑蔭トークを開催しました。  
今号では第3回と4回の報告を掲載します。

第3回 6月11日

### 三多摩の市民活動をたどる

江頭晃子

(運営委員・アンティ多摩)



多摩地域の戦後の市民活動の歩みは全国の歩みと大きくは外れないが、いくつか特徴がある。1つは農村地帯から急激に都市化されたこと。それにより生活改善運動と乱開発等変化に対する反対運動があったこと。2つめは、他地域からの新住民の流入により、多様な価値観が

入り、市民活動の担い手が多くいたこと。もう1つは、都市部と近く全国的・世界的な動きとも連動しやすかったこと、などである。また、大都市東京の一部ではあるが、明治初期まで神奈川県に所属し、自由民権運動が盛んだった土地でもある。町田・八王子市以外は人口10万人前後の中核市が多いこともあ

り、鉄道沿線、流域、丘陵などを共有し「三多摩」としてのアイデンティティを持ち、横のつながりが強い特徴もある。大まかであるが、三多摩の市民活動の歴史をたどってみたい。

戦後から1950年代までは、文化・学び・青年・農村がキーワード。騙されていた思いが、学び・文化を復活させて個々の主体性の確立を急がせた。民主主義社会への実現へと束の間の夢を馳せ、社会への参加欲求が広がった束の間の時代である。60〜70年代は、企業による乱開発と優先施策が異なる行政に対する、市民が闘わざるを得ない運

動の時代。公害・自然破壊への反対運動、子どもや障害者への権利擁護運動、保育園や教育に対する公共施設実現のための運動が各地で展開される。80〜90年代は、市民組織が社会の担い手として、行政・企業では実現できない価値観や事業への模索が始まる。女性差別撤廃への女性ネットワーク組織、障害者の地域での共同作業所や高齢者の食事・ヘルパーサービスなどの事業への展開、よりよい食を求める共同購入・消費者運動、そしてオルタナティブな価値観の提示としてのフリースクールなど。21世紀に入ってから

市民側が提案した組織や価値に行政・企業組織がのっかってくる時代でもあり、市民組織の多様化・分断も顕在。ファシズム的政策、新たな乱開発などの闘いなども起こっている。  
具体的な市民組織の展開として、「たんぐり会」(1957-1996年)の活動を同会発行の通信『田無・法やどんぐり』を追いながら紹介した。(江頭・記)

第4回 10月22日

### 市民活動を分類する

町村敬志

(運営委員・一橋大学)



てきている。

ミニコミの分類という実践にはどのような困難が存在するのか。本アーカイブの経験のほか、住民図書館による『ミニコミ総目録』

市民活動資料をどう配架するか。市民がつくるミニコミを保存・公開する施設にとって悩ましい課題としてある。テーマごとに分類されていれば類似のミニコミを見つけやすいなどのメリットがある。しかし分類には大きな作業負担を伴う。市民アーカイブ多摩の場合、前身の「市民活動サービスマン」時代に由来する「ミニコミ分類表」に基づき、おもにテーマ内容に

(92年、平凡社)作成の際の経験談「湯瀬秀行『ミニコミ・データベース』と『ミニコミ総目録』の編集」(『書誌索引展覧』16(4)、92年)などをもとに、以下、4つの困難を挙げていこう。

第1に、分類項目を何らかの観点から見て「意味」あるものとして、網羅的にかつ限られた数で作成することに伴う困難が、基本的な点として存在する。「意味」は扱われるテーマに求められることが多いが、そもそも

かは無視できない課題となる。分類が一種の決めつけとならない配慮が欠かせない。

第2に、個別具体のミニコミを限定された分類項目へと結びつけていくことに伴う困難がある。うまく対応させられないことも多い。複数テーマを扱ったり、テーマが時間とともに変わるミニコミはどうするか。

第3に、分類基準は常に時間的経過とともに古くなり現実からずれてしまう。しかし分類を事後的に変えることには膨大な作業を要する。複数分類を共存させることも難しい。

第4に、分類とはアーカイブ側の事情にすぎない。したがって、アーカイブ側とミニコミ作成者の距離が近い市民資料の場合、両者の関係をどう調整する

かは無視できない課題となる。分類が一種の決めつけとならない配慮が欠かせない。

第2に、個別具体のミニコミを限定された分類項目へと結びつけていくことに伴う困難がある。うまく対応させられないことも多い。複数テーマを扱ったり、テーマが時間とともに変わるミニコミはどうするか。

第3に、分類基準は常に時間的経過とともに古くなり現実からずれてしまう。しかし分類を事後的に変えることには膨大な作業を要する。複数分類を共存させることも難しい。

第4に、分類とはアーカイブ側の事情にすぎない。したがって、アーカイブ側とミニコミ作成者の距離が近い市民資料の場合、両者の関係をどう調整する

かは無視できない課題となる。分類が一種の決めつけとならない配慮が欠かせない。

第2に、個別具体のミニコミを限定された分類項目へと結びつけていくことに伴う困難がある。うまく対応させられないことも多い。複数テーマを扱ったり、テーマが時間とともに変わるミニコミはどうするか。

第3に、分類基準は常に時間的経過とともに古くなり現実からずれてしまう。しかし分類を事後的に変えることには膨大な作業を要する。複数分類を共存させることも難しい。

第4に、分類とはアーカイブ側の事情にすぎない。したがって、アーカイブ側とミニコミ作成者の距離が近い市民資料の場合、両者の関係をどう調整する



# ミニコミ紹介

市民アーカイブ多摩が所蔵する、団体や個人が発行する会報・通信ミニコミを、発行者の方に紹介していただきます。

## 沖縄の怒りと共に

悪質なデマには真実をもって対抗しよう。今年1月2日のTOKYO-MXテレビの番組が辺野古・高江の反対運動を嘲笑し偏見をまき散らす、悪意丸出しとしか言いようがない報道をしました。「手当をもらって外から出勤してくるテロリスト」云々

『通信98号』表紙の写真(左)をご覧ください。高江N1ゲート前で抗議する人々がダンスをしています。沖縄の闘いは、どんなにきつい時にも歌や踊りが出て、しなやか、非暴力です。

『通信99号』の表紙の写真は、今年の元旦に辺野古浜で祈る人々です。中には稲嶺進・律子

名護市長夫妻、いつも辺野古で座り込みを続けている島袋文子さん(87歳)もいます。この日は200人が初日の出を観に、辺野古浜に集まりました。

1995年9月、沖縄で起きた少女レイプ事件に対する沖縄の怒りが、本土の私たちを揺さぶりました。10月、日野市の仲間たちで政府交渉(総理府、防衛庁(当時)、外務省)を行ない、12月、日野市議会に政府への意見書を出す「陳情」を提出(全会一致で採択)し、沖縄に無関心だった罪深さを痛感し、96年1月「うちなんちゅの怒りとともに! 三多摩市民の会」を発足しました。

「沖縄に関することは足元の問題にも取り組むこと」が、発足時確認したことでした。また当事者の位置に自分を置いて感じる現地主義を取りたいと立川・横田基地ツアー、北富士演習場ツアーなどを企画しました。

会が発足して21年。会の規模もメンバーも変わり、沖縄との関わり方も力量も変化しました



- ・創刊1996年、600部、B5判、30頁前後、モノクロ、年4回程度発行
- ・定期購読料: 年2000円(送料込み)
- ・tel・fax: 042-592-3806 (古荘)
- ・当館所蔵: 38-99号

▽99号内容=表紙: 元旦、辺野古浜での祈り、あきらめないしなやかに非暴力で(編集部)、沖縄からのたより: 友は勝利を呼ぶ、政府宛 オスプレイ抗議要請書、講演記録、沖縄レポート他

## こがねい女性ネットワーク ニュース

小金井で男女共同参画社会を目指す緩やかな市民の「こがねい女性ネットワーク」(96年発足)が発行する機関紙です。年に3〜4回発行し、1回につき約50部を会員に郵送。残りは市内の公民館5分館に置かせてもらっています。当初は人材にも恵まれ見開き8頁構成で、余白のカットも任された4人がそのまま印刷できる状態まで担当しており、充実した内容を含めて

が、会の「沖縄に関すること」足元の問題に取り組む」スタンスは変わりません。また現地に身を置くこと(現地主義)も変わらないうちなんちゅの怒りとともに! 三多摩市民の会」が発信し続けることも重要だと感じています。

21年前に比べ、辺野古・高江の問題は格段に知られるようになり、チラシで辺野古にフリガナをしなくても通じるようになりました。運動に関わる人たちも、圧倒的に増えました。

会の「通信」は、沖縄・基地問題の他、原発、環境問題、教育問題、地域の問題などを取り上げています。とりわけ講演会記録はお薦め。99号では「望月衣塑子さん講演記録: 日本の武器輸出はどうなっていくのか」がおすすめです。(古荘斗系子)

### 「こがねい女性ネットワーク ニュース」

『何を怖れる フェミニズムを生きた女たち』  
上映会 決定!!

2015年10月20日(水) 18:00開演 18:00開演  
上 場 4 回 12:00開演 18:00開演 20:00開演  
2 回 12:00開演 18:00開演 20:00開演  
観覧料: 500円(1回)、300円(2回) 希望献金あり

※会場まで、市内の公民館まで  
は、上映会と同時にゲストトーク  
も行う予定です。  
が、会場までの交通費は自己負担  
となります。お申し込みの際は、お  
申し込みの人数を教えてください。  
会場までの交通費は自己負担  
となります。お申し込みの際は、お  
申し込みの人数を教えてください。

小倉井市男女共同参画室との  
懇談会のお知らせ

日時 2015年10月8日(水) 14:00-16:00  
場所 小倉井市男女共同参画室2号 5F 501号室  
(東武有楽町線)

参観料と希望の参観料(お申し込み)は、お申し込みの人数を教えてください。  
お申し込みの人数を教えてください。  
お申し込みの人数を教えてください。

2015年7月14日発行 小倉井市男女共同参画室(パブリック)  
E-mail: koganeyonews@com.koganei.jp URL: http://koganeyonews.doorblog.jp/

『「ニュース」』には発行への思いが感じられます。当時は『ニュース』を合冊して縮刷版を作ったり、女性史編さんなどにも意欲的に取り組んでいました。

しかし、ここ数年、高齢化や介護問題で会員数が減少し、役員のなり手がなくなり、当会に解散風が吹き「ニュース」も4頁に減少。そんな危機感を払拭しようと、松井久子監督のライブがテーマのドキュメンタリー映画「何を怖れる」の上映会を開催、久しぶりに6頁となりました。

『「ニュース」』の内容は大体、活動報告、審議会や運営委員会報告、頑張っている女性の記事にインフォメーション、編集後記と続きます。例えば最新の76号は新年会の案内、DVD「ミューズカル女の解放1975」、ブックトーク「わたしは忘れない小倉井の3・11で給食と放射能汚染の問題、クリントン敗北後の演説の女性による翻訳、「日本国憲法」上映会報告、市の男女共同参画事業「こがねいパレット」の

報告。最後の頁は男女平等推進審議会。行動計画素案の意見募集。情報として、市川房枝記念会の反原発セミナー、フォトムービー「小金井の女性たち」、矯風会130年「女性作曲家《不在》の理由」などを紹介しています。

私自身、これまで小金井のみ問題で活動してきましたが、女性ネットの担い手の不在は深刻です。活動の企画運営「ニュース」発行も3人体制では難しい現状です。しかし、暮らしを共にする同じ地域の中で女たちがつながる意味は大きいのです。

日常生活から女性の地位向上を目指し「ガラスの天井」を少しでも薄くしたい。「何を怖れる」のフェミニズムを生きた女たちのバトンを次の世代に手渡すべく「ニュース」を読んだ女性(男性も)が元氣になり、男女平等という意識を自覚し、循環させ、それが体現されることを願っています。

あなたの周りは、公平にまわっていますか? (中村良子)

- ・創刊1996年、150部、A4判、4-6頁、モノクロ、年3-4回発行
- ・tel・fax: 042-385-9755 (中村)
- ・http://koganeyonews.doorblog.jp/
- ・年会費1500円
- ・当館所蔵: 36-60, 64-72, 76号
- ▽72号内容=上映会案内小金井市男女共同参画室との懇談会のお知らせ、総会報告、男女共同参画シンポ参加報告他

## 運動資料を活かすための体制を

加藤 一夫

(静岡福祉大学名誉教授  
ビキニ市民ネット焼津代表)

### □反核平和運動の聖地で

2015年10月まで私自身25年近くを静岡県焼津市で過ごした。焼津は人口14万程度の歴史の古い港町であるが、63年前の第五福竜丸事件(ビキニ事件)の町としても知られている。現在は、戦後反核平和運動の出発点に位置する町で「聖地」とされている。その町で、平和運動や浜岡原発の廃炉を目指す運動を長く続けてきた。

### □その地域に残す意味

社会運動や市民活動は、ビラ・チラシ、機関誌などを発行して市民に配るが、問題は運動が残す資料類である。運動が終われば捨てるのか、あるいは後世に残しておくのか、保存するとなると、これをどう生かすのか(第三者が使えるようにする)を考えねばならない。これが難しい。理由はいろいろある。

1つは、地域の社会運動、市民活動の記録は、その場所に、そ

の地域に残すことが大切である。地域生活圏の運動だからだ。もうひとつはそれを保存・活用する場を作ること、そしてそれを活用できるシステムを作らねばならない。問題はこれを保存する場所がないのである。空き家の活用も考えたが難しい。私たちの運動資料もダンボールに詰め込んだままだ。

静岡市には、71年から全員ボランティアで構成されている「静岡平和資料センター」が「静岡平和資料館」を目指している。戦災・空襲記録を保存して、次の世代につなげていくためだが、念願の資料館は

今もって実現していない。こうした動きは、各地にたくさんある。自治体では財政との関係で建設はかなり難しい。

今もって実現していない。こうした動きは、各地にたくさんある。自治体では財政との関係で建設はかなり難しい。

### □反・脱原発運動資料を残す

70年から92年まで、私自身、国立国会図書館に勤務していた。現物(第一次資料)についていろいろ研究した。60年代末からベトナム反戦運動、反公害運動、三里塚農民闘争、沖縄返還運動などの高揚期であった。その運動の資産を立ち上げた五味正彦君らと

### □市民アーカイブ多摩への期待

私自身がアーカイブ運動に興味や関心を持つのは、そうした体験と背景があるからだ。「市民アーカイブ多摩」にはこれから様々な試練が待ち受けていると思うが、着実に発展することを望んでいる。

このアーカイブがその他の地域に、そして全国に拡大していく先駆的役割を果たすと思うからである。(会員)

### 市民アーカイブ多摩の

### 資料棚から⑤ 原発(追記)

### 「子ども保養」の現状

### ■被曝した子どもも保養の今

本紙の前号P6に掲載の「資料棚から⑤(原発)」に掲載した一文「チェルノブイリ事故汚染地帯のウクライナなどでは、国が子どもたちを一定期間被ばく環境から遠ざける集団疎開(以下、「保養」)事業を事故から30年たった今も継続しており…」について、長年チェルノブイリ事故汚染地の子どもの保養を支援している「チェルノブイリ子ども基金」からご指摘をいただいた。「ウクライナでは国の予算による保養が、障害のある

人たちが(それも小規模)以外には受けられなくなった、ロシアとの戦闘が大きな影響している、と現地の慈善団体から聞いている」との内容だった。

そこで、ベラルーシ、ウクライナ、日本の子どもの保養の現状や国の施策の違いを把握できる、最新情報が載った日本語文献を調べてみた。

### ■「国の責任」vs「寄付金」で運営

結論をいえば、ウクライナ(資料①)、ベラルーシ(資料②③)では、ご指摘の通り保養は年々縮小され、参加できるのは該当者のすべてではないが、両国とも事故から30年を過ぎた今も、通称「チェルノブイリ法」により保養は被災者の権利とされ、3週間余りの子どもたちの保養が国や州の予算で継続されている。一方

日本では民間団体が主に寄付金により実施しているが、参加できる人数は多くなく、期間も平均5〜6日と短期保養がほとんどであることが分かった(資料④⑤)。

原発事故後に子どもの甲状腺がんが福島県で年々増え、悪性疑いも含め183人(16年12月福島県発表)に達した。チェルノブイリ事故汚染地では事故から30年間に甲状腺がん以外の疾患も年々増加し、現地医療関係者の多くは晩発性障害(低線量被ばくによる影響)の可能性を否定できないとしている(『ウクライナ政府報告書』『チェルノブイリ政府報告書』2011年発表)。

### ■汚染地住民の権利はどこに

日本は法令で一般の人の年間被

ばくは年1mSv(ミリシーベルト)が限度と決められているにもかかわらず、3・11後の日本政府の基準は、「年20mSv以下の地域に住む人は子どもも含めて避難する必要はない」としている。ウクライナでは年0.5mSv以上、ベラルーシでは年1mSv上の汚染地住民の権利が法で明確にされ、保養もその一環で続けられてきた。

長期保養により体内放射性物質が排出される効果は大きい(資料②⑥)。細胞分裂が盛んな子どもは、放射線の影響を大人の何倍も受けやすいのは、どこの国でも変わらない。

### 【参考資料】(2016・12現在)

- ①尾松亮「事故30年チェルノブイリからの問い」(『世界』2016年5月号、6月号)
- ②『ベラルーシ視察報告書 未来へのかけはし』(2016年3月F.O.EJAPAN)
- ③『チェルノブイリ原発事故 ベラルーシ政府報告書』(2011年邦訳版は産学社)
- ④『原発事故に伴う保養実態調査結果報告書』(2016年7月31日受入全国協議会ワーキンググループ他)
- ⑤『福島原発事故による放射能からの保養プログラム』2013年度のの実施状況(神戸大学 鈴木一正)
- ⑥原子力市民委員会「中間報告2013 原稿 保養の国庫・自治体援助の可能性」

参考資料の閲覧と各資料に掲載された詳細について知りたい方は、当会事務局までお問合せください。

(中村光一) 会員、ボランティアスタッフ



記憶と記録の場をめぐる旅⑨

## ふかさわ まさお 深沢晟雄資料館

「生命の尊厳、尊重」の理念と実績を伝える

◇全国初の老人医療費の無料化、  
乳児死亡率ゼロを実現

岩手県旧沢内村(現和賀郡西和賀町)は、かつて豪雪、貧困、多病多死の三重苦に苦しめられていた。その地で、村の教育長、助役を経て、1957年に村長に就任したのが深沢晟雄氏だった。

深沢氏は、まず、冬は車が通れなくなる県道をブルドーザーで除雪して冬季の交通を確保した。医師を確保し、保健

婦を配置して、医療、保健、福祉を一体とした行政を展開。60

年には65歳以上の老人医療費を全国に先駆けて無料化し、61年には無料化を60歳以上のお年寄りと乳児にまで拡大した。その結果、それまで全国平均の2倍だった乳児の死亡率を、全国で初めてゼロにし、広く知られるところとなった。

高齢者の医療費無料化の際には、県から法律違反の疑いを指摘されたが、「法律に違反しても憲法に違反してない」と言って突っぱねたという。

多忙のあまり、自らの健康をかえりみることもなかった深沢氏は、在職8年、59歳でガンにかかり、命を落とした。県外の病院で亡くなり、盛岡からの県道1号を通って遺体が帰って来た時には、降りしきる雪中、2千人を超える村びとが出迎えたという。

◇NPO法人「深沢晟雄の会」が運営

深沢晟雄資料館は、その深沢



氏の、生命尊重を第一とする精神と業績に学び、伝えるために、地元住民有志がNPO法人「深沢晟雄の会」を設立して整備し、2008年10月に開館した。

建物には旧沢内病院の看護婦寮があてられ、資料は深沢氏の遺族や沢内病院の関係者が、遺品や資料約千点を提供したもので成り立っている。

建物の外には、深沢氏の胸像と「老人医療無料診療発祥の地記念碑」が建てられている。

内部は、四つほどのコーナーに分けられ、壁面のパネル写真と展示ケースのなかの資料で、ほぼ年代順に深沢氏の事績と村内の動きが分かるようになっている。

最後のコーナーには、村長時代の執務机がおかれ(写真上)、他のコーナーには深沢氏の衣服、手紙、手帳、最後に入院した病院の診察券などが陳列されている。

また、深沢氏が憲法公布直後の1947年に、青年会の講座で、戦争放棄や生存権をうたった憲法9条や25条の意義を説いた、その草稿が見つかったという新聞記事も目をひく。

所蔵資料は殆ど展示されていて、一部が事務室にあるだけのことだが、その中には、前記の草稿のほかに珍しいものとして、マラソンの公務員ランナー川内優輝氏が学生時代に書いた「地方自治と深沢村長」という論文もあるとのこと。

別のコーナーでは、大型のテレビで各種の映像資料が見られるようになっている。

◇利用者は8年で2万人に

利用者は、児童・生徒、自治体関係者、学生・研究者、ジャーナリスト等で、JICA(国際協力機構) 幹旋による海外からの研修者もいるという。昨年(2016年)5月には、開館8年目で利用者は2万人に達した。冬期は原則として閉じているこ

とを考えると、これはかなりの数と言っているだろう。

運営には、町からの補助金も受けて、前記「深沢晟雄の会」が当たっている。専任の職員は1名、説明のためのボランティアが4〜5名とのこと。

雪深い東北の地での、深沢村長を先頭とする人びとの事績と、それを伝えようとする熱意と努力に感銘を受けた。

(平川千宏 会員)

【参考資料】

- ・菊地武雄『自分たちで生命を守った村』(岩波新書)
- ・及川和男『村長ありき―沢内村深沢晟雄の生涯』(新潮文庫、のち、れんが書房新社)
- ・深沢晟雄の会『深沢晟雄の会 ニュース』(隔月刊)
- ・劇映画『いのちの山河』(大沢豊監督)
- ・記録映画『いのちの作法』(小池征人監督)

### 深澤晟雄資料館

- ・所在地：〒029-5614 岩手県和賀郡西和賀町沢内字太田 2-68
- ・Tel・Fax：0197-85-3838
- ・E-mail：masao@nisiwaga.net
- ・休館日：火曜日(休日の場合は翌日) 冬期 12.1~3.31 は休館(予約開館には対応)
- ・開館時間：10時~16時
- ・入館料：大人・学生 300円、中・高校生 200円、小学生無料、団体割引あり



# アーカイブ多摩 日記

## ◆大掃除(＆花見)

開館から丸3年になります。網渡りながらも毎月5〜7回の開館日を維持することができました。来館者の方はもちろん、資料整理ボランティア、当番として入る運営委員と、開館したからこそより多くの人が資料に触れ、それぞれの視点から資料がより活きてきています。スペースの有効活用を兼ねて、大掃除を開催します。どなたの参加も大歓迎です。3月26日(日) 10〜13時。終了後、花見兼交流会。ご参加、お待ちしております。

## ◆冬の市民アーカイブ

立川市の保護樹林地に隣接する当館は、11月の大雪で背の高い真っ白な樹林に囲まれ、厳粛な雰囲気になりました。寒い12

月は残念ながら来館者が無く、ひたすら資料整理に没頭する日々。年が明けて1月に入ると、続けての来館者。「探している資料」「関心があること」などを伺いながら、関係する資料や団体・活動紹介の話に花が咲きます。来館された方の興味や視点、資料の見方、新しい価値観に元気をもらっています。

## ◆丸山尚さん逝去

日本で初めてのミニコミ図書館である「日本ミニコミセンター(1971〜1974)」「住民図書館(1976〜2001)」を設立・運営されてきた中心の丸山尚(ひさし)さんが、昨年12月3日に逝去されました。80歳でした。私たちが「市民アーカイブ多摩」を開館・運営するにあたっては、住民図書館の経験・知恵・人に多くの示唆と助けをいただき続けています。ご冥福をお祈りします。

## 運営委員会など

10月21日 第7回運営委員会。参加者5人。会員・カンパ者、当番確認、利用者対応等報告(毎回)、道場さん追悼の会(1/9)、第3期緑蔭トーク、総会等内容検討他。  
10月22日 第2期緑蔭トーク④開催。参加者15人。  
11月18日 第8回運営委員会。参加者6人。緑蔭トーク・平和学会参加報告、原稿執筆検討、通信8号反響。1/9催し、緑蔭トーク、総会記念講演、通信9号内容検討他。  
12月16日 第9回運営委員会。参加者7人。丸山尚さん逝去・追悼の会、1/9催し役割分担・事前学習会、アーカイブ通信9号他。  
12月20日「道場親信さんの仕事」についてミニ学習会。参加者6人。  
2017年1月9日「アーカイブを市民の力に」道場親信の仕事と私たち開催。参加者40人。  
1月20日 第10回運営委員会。参加者7人。他団体の市民活動資料の状況、1/9感想・反省、総会来年度方針記念講演会検討他。

## 来館者・参加者等の声

・図書館に並んでいないような雑誌が多く、貴重な情報が沢山入っています。是非、色々な人に訪問していただきたいです。  
・古民家のように、とても雰囲気が良い。多摩っぽいと思いました。  
・様々な立場の資料を収集することが必要だと思いました。  
・資料の「解題」が大切で、実践運動と保存、研究領域(教育をも含む)か、解題はそれを「つなげていく」ことではないか、と思います。  
・私は大学院で歴史学を専攻しているのですが、自分が普段使っている資料の保存は様々な人たちの苦勞と思いがあってはじめて成り立っているのだなと感じました。  
・資料がどういうところでのどのように活かされていくのかを考え合わせて、どう保管していくかも大事ということを考えさせられた。

## カンパありがとう

岩本陽児、上野英雄、空木茜、豊野美智子、波多野ゆき枝、横田順子、来館者・1/9参加者の皆様(2016.10.1〜2017.1.31 敬称略)

## 会員数(2017.1)

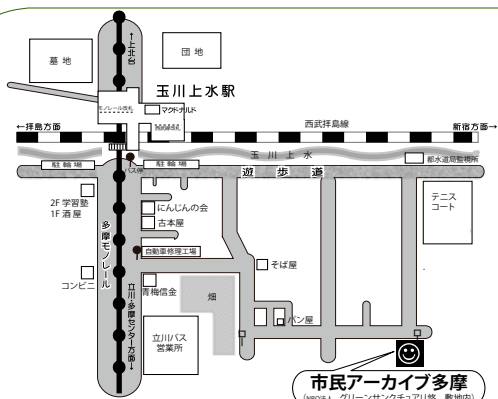
・140人(正会員62、賛助会員78)

## ◆新規入会ありがとう(敬称略)

・賛助会員Ⅱ奥津とし子、北嶋孝、菅波完、辻浩、筒井弥生、長堀雅春、匿名2人

## 編集後記

2011〜12年に、道場親信さんを中心に、五味正彦さんも一緒に丸山尚さんのヒアリングをした。きつと今頃3人で話の続きをしていることだろう。3人共に紙資料を遺してくれており、その考えや大切にすべき視点、資料室運営の知恵などの足跡を辿ることができる。繋いでくれてありがとう。(鈴・湯・増・江)



## 【市民アーカイブ多摩利用案内】

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日(8月中旬・年末年始の休館あり)
- ・開館時間：午後1時〜4時 ・入館カンパ：100円〜
- ・所在地：東京都立川市幸町5-9-6-7  
(多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南側徒歩8分)
- ・電話& fax：042-5336-5535 (電話は開館中のみ)
- ・見られる資料：2002年以降に市民活動団体や個人が発行するミニコミ(通信や会報など)1400タイトルほか
- ・ホームページにミニコミのタイトル、発行団体を掲載しています。  
[www.c-archive.jp](http://www.c-archive.jp)